

創世記18 創世記10章1節～32節

「セム、ハム、ヤペテの歴史」

イントロ：

1. 前回までの復習
 - (1) 創世記には11の区分（トルドット）がある。
 - (2) ここから第4の区分が始まる（10：1～11：9）。
 - (3) 「セム、ハム、ヤペテの歴史」とは、ノアの息子たちのその後の広がりの説明である。
 - (4) 大洪水の前には、息子たちには子どもはいなかった。全員が洪水の後で生まれた。
 - (5) 人類は、ノアの3人の息子から広がった。

2. メッセージのアウトライン
 - (1) 創10章の概観
 - (2) ヤペテの系図
 - (3) ハムの系図
 - (4) セムの系図

3. きょうのメッセージは、私たちに何を教えているか。
 - (1) 第4の区分は、11章のバベルの塔の事件も含んでいる。
 - (2) 10章は、人類の一体性を教えている。
 - (3) 11章の前半は、民族間の対立を教えている。

このメッセージは、人類が抱える問題（対立と憎しみ）の原因を探り、その解決を模索するものである。

I. 創10章の概観（10：1）

1. 年の順番に解説があるわけではない。
 - (1) ヤペテ、ハム、セムの順番
 - (2) メシアの家系でないものから扱う。
 - (3) セムの家系が最後に出てくる。
2. 創10章が書かれた目的
 - (1) 神の摂理によって諸国が配置された。
 - (2) 配置する際の原則は、イスラエルと諸国との関係（申32：8～9）。

「いと高き方が、国々に、相続地を持たせ、人の子らを、振り当てられたとき、イスラ

エルの子らの数にしたがって、国々の民の境を決められた。主の割り当て分はご自分の民であるから、ヤコブは主の相続地である」

(3) 人類の一体性が教えられている。

3. この記録の歴史性

(1) I 歴1:4~23では、この内容がそのままコピーされている。

(2) ノアの系図は歴史的記述として理解された。

4. 区分の方法

(1) 地理的区分

(2) 言語的区分

(3) 部族的区分

(4) 民族的区分

5. 名前

(1) 個人名

(2) 町の名前

(3) 部族名

(4) 民族名

II. 10:2~5 ヤペテの系図(合計14の氏族)

1. ヤペテには7人の息子が生まれた。

2. その中で2人だけが取り上げられている。

(1) ゴメルには、3人の息子が生まれた。

(2) ヤワンには、4人の息子が生まれた。

3. 地理的広がり

「これらから海沿いの国々が分かれ出て、その地方により、氏族ごとに、それぞれ国々の国語があった」(5節)

(1) エーゲ海からカスピ海にかけて分布する。

(2) 彼らはさらに広がった。ヨーロッパ、ペルシャ、インド、アジアのほとんど。

(3) これは、創9:27の成就である。

(4) 「それぞれ国々の国語があった」

(これによって、この系図はバベルの塔以降に書かれたものであることが分かる)

III. 10:6~20 ハムの系図(合計30の氏族)

1. ハムには4人には息子が生まれた。

2. その中で3人だけが取り上げられている。クシュ、ミツライム、カナン。

3. クシュには、6人の息子が生まれた。

(1) その中で重要なのが6番目の息子のニムロデである。

(2) 名前の意味は、「反逆する」。後で与えられた名前であろう。

(3) 「地上で最初の権力者となった」

①訳文の比較 創10:9

【口語訳】 彼は主の前に力ある狩猟者であった。これから「主の前に力ある狩猟者ニムロデのごとし」ということわざが起った。

【新改訳改訂3】 彼は【主】のおかげで、力ある獵師になったので、「【主】のおかげで、力ある獵師ニムロデのようだ」と言われるようになった。

【新共同訳】 彼は、主の御前に勇敢な狩人であり、「主の御前に勇敢な狩人ニムロドのようだ」という言い方がある。

②原文の直訳は、「ヤハウエの顔の前に」

* 神に反逆する彼の姿が表現されている。邪悪な者。

* 彼は獣の狩猟者であるばかりか、人を狩る者ともなった。

* 「主の前に力ある狩猟者ニムロデのごとし」ということわざが生まれた。

③彼は、人類の歴史上、初めて王国を建てる者となった。

④シヌアル(バビロニア)

* 彼はバベルの塔事件の首謀者であろう。

* バビロン捕囚の種が蒔かれた。

⑤アシュル(アッシリヤ)

* 言葉の混乱以降に、アシュルに移動せざるを得なくなった。

* アッシリヤ捕囚の種が蒔かれた。

4. ミツライムには、7人の息子が生まれた。

(1) ミツライムとは、エジプトのことである。

5. カナンには11人の息子が生まれた。

(1) カナンはノアの預言によって呪われた民である。

(2) 彼らは、後にイスラエルを攻撃する民となる。

IV. 10:21~31 セムの系図(合計26の氏族)

1. 10章21節が重要

(1) 「エベル」とは、「ヘブル人」という言葉の語源。

(2) セム→エベル→ヘブル人と続く。

2. セムには5人の息子たちが生まれる。

3. その中で、アラムとアルパクシャデが取り上げられている。
4. アルパクシャデが重要。メシアの家系。
5. アルパクシャデとシェラフの間に、もう1人の人物が入る。
 - (1) ルカ3:35~36によれば、それはカイナンである。

「セルグの子、レウの子、ペレグの子、エベルの子、サラの子、カイナンの子、アルパクサデの子、セムの子、ノアの子、ラメクの子」

*アルパクシャデとシェラフ(サラ)の間にカイナンが入っている。

*70人訳聖書から取られている。
 - (2) シェラフ
 - (3) エバル。ヘブル人の父。
 - (4) エバルの2人の息子
 - ①ペレグ(分けるという意味)

「彼の時代に地が分けられたからである」。バベルの塔での言葉の混乱。
 - ②ヨクタン

*13人の息子たち(すべてアラビア人)
 - ③ペレグの子孫が書かれていないのは、それがメシアの系図であるから。

*創3:15の「女の子孫」の約束

結論

1. セム、ハム、ヤペテから70の部族(氏族)が出た。人類の統一性。
2. メシアの家系でないものから扱い、最後に本流を取り上げるという手法。
3. セムの家系、ペレグの家系からメシアが誕生する。
4. イスラエルの子らの数にしたがって、国々の民の地境が決められた。
5. 創10章は、人類の対立も描いている。その原因は、バベルの塔事件にある。
6. 聖書的歴史観が提示されている。
 - (1) 人類の問題の原因は、神への反抗である。その結果、対立が生まれてきた。
 - (2) アブラハムの選びは、創3:15の約束の延長線上にある。
 - (3) アブラハムの子孫として誕生するメシアは、神と人類の仲介者となる。
 - (4) 民族の和解に先立つのは、神との和解である。

(例話) メシアニック・ジューとアラブ人クリスチャンの和解運動